日本英文学会中部支部

第 77 回大会プログラム

シンポジウム・研究発表要旨

開催日：2025 年 10 月 25 日（土）

会　場：中部大学

（愛知県春日井市松本町 1200）

会場（中部大学）へのアクセス

【公共交通機関をご利用の場合】

JR 名古屋駅より JR 中央本線にて JR「神領」駅まで約 26 分（430 円）

JR「神領」駅北口より名鉄バス（中部大学線）にて中部大学まで約 10 分（260 円）

【自動車をご利用の場合】

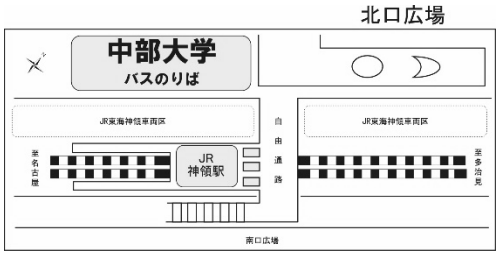
東名高速道路春日井インターチェンジより約 5 分

入構の際は、正門で駐車場の位置をご確認ください。

名鉄バス中部大学線 時刻表

2025年4月1日

	土曜日	
	神領駅北口発	中部大学発
7	25 50	35
8	05 15 25 35 45 55	00 15 25 45
9	05 15 25 40	05 25 45
10	00 20 35 55	10 25 45
11	15 35 55	05 25 45
12	15 35 55	05 25 45
13	10 30 50	00 20 40
14	10 30 50	00 20 40
15	10 30 50	00 20 40
16	10 30 50	00 20 40
17	10 20 45	00 10 20 30 50
18	10 40	00 20 50
19	10 40	20 50
20	10 40	20 50
21	10 40	20 50



◎開催校からのお知らせ

【食事場所について】

大会当日、大学内の食堂は営業しておりません。会場近隣や JR 神領駅周辺には食事をする場所はあまりありませんので、ご注意ください。

【周辺のコンビニについて】

大学内のコンビニは 15 時まで営業しております。片道徒歩 15 分ほどの場所にもコンビニがあります。また、大学内にはスターバックスもあります（17 時まで営業）。

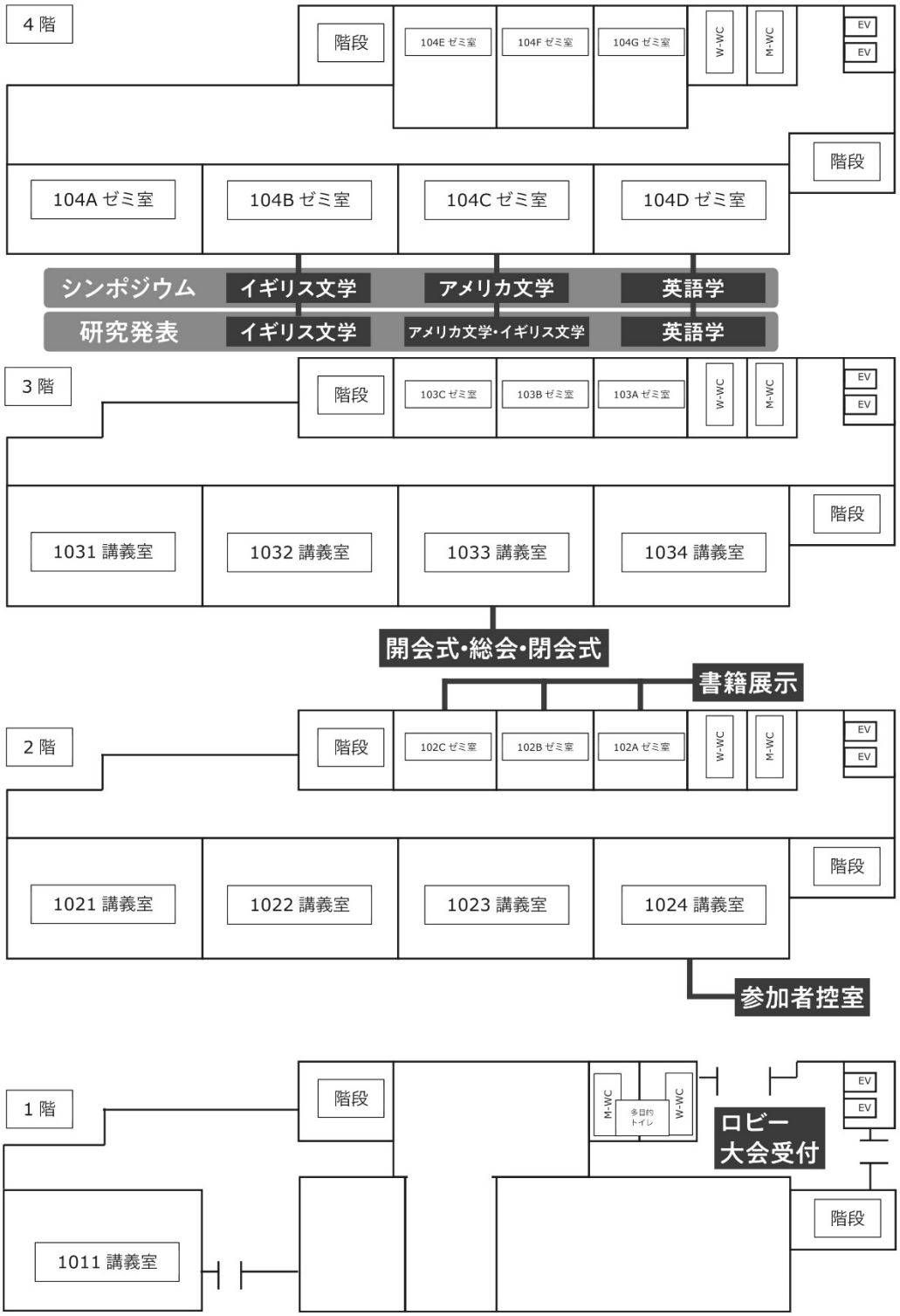
【懇親会について】

開催校の都合により、懇親会は開催いたしません。参加者控室（10号館2階1024講義室）にお飲み物などをご用意いたします。

◎開催校からのお願い

大学内は全面禁煙です。喫煙場所はございません。建物内だけでなく、駐車場、車内での喫煙、大学周辺の歩道等での喫煙もご遠慮ください。

会場（10 号館）案内図


4 階
階段
104E ゼミ室
104F ゼミ室
104G ゼミ室
W-WC
M-WC
EV
EV
階段
104A ゼミ室
104B ゼミ室
104C ゼミ室
104D ゼミ室
シンポジウム
イギリス文学
アメリカ文学
英語学
研究発表
イギリス文学
アメリカ文学・イギリス文学
英語学
3 階
階段
103C ゼミ室
103B ゼミ室
103A ゼミ室
W-WC
M-WC
EV
EV
階段
1031 講義室
1032 講義室
1033 講義室
1034 講義室
開会式・総会・閉会式
書籍展示
2 階
階段
102C ゼミ室
102B ゼミ室
102A ゼミ室
W-WC
M-WC
EV
EV
階段
1021 講義室
1022 講義室
1023 講義室
1024 講義室
参加者控室
1 階
階段
M-WC
多目的トイレ
W-WC
ロビー
大会受付
EV
EV
階段
1011 講義室

日本英文学会中部支部第 77 回大会プログラム

開催日：2025 年 10 月 25 日（土）
会　場：中部大学（愛知県春日井市松本町 1200）

大会受付　12:00 より　（10 号館 1 階ロビー）

開 会 式　12:30～12:35　（10 号館 3 階 1033 講義室）
開会の辞　日本英文学会中部支部 支部長　太　田　直　子

総　　会　12:35～12:50　（10 号館 3 階 1033 講義室）

シンポジウム　13:00～15:10

第 1 室（イギリス文学）　10 号館 4 階 104B ゼミ室
身体、感覚とイギリス・モダニズム
司会・講師　伊　藤　裕　子（中部大学教授）
講　　師　石　川　隆　士（甲南大学教授）
講　　師　中土井　　智（名古屋外国語大学講師）
講　　師　四　戸　慶　介（岐阜聖徳学園大学講師）

第 2 室（アメリカ文学）　10 号館 4 階 104C ゼミ室
アメリカ現代文学とディストピア
司会・講師　安　保　夏　絵（中部大学助教）
講　　師　髙　村　峰　生（関西学院大学教授）
講　　師　林　　日佳理（岐阜大学准教授）

第 3 室（英語学）　10 号館 4 階 104D ゼミ室
理論言語学、対照言語学的視点から見た主語と目的語の非対称性に対する統語的アプローチ
司会・講師　勝　　愼　将（南山大学講師）
講　　師　廣　川　貴　朗（福井大学講師）
講　　師　野　口　雄　矢（東京農工大学講師）
講　　師　田　中　祐　太（中部大学講師）

研究発表　15:25～16:50

第 1 室（イギリス文学）　10 号館 4 階 104B ゼミ室
第 2 室（アメリカ文学・イギリス文学）　10 号館 4 階 104C ゼミ室
第 3 室（英語学）　10 号館 4 階 104D ゼミ室

（第 1 発表　15:25～15:50
第 2 発表　15:55～16:20
第 3 発表　16:25～16:50）

閉 会 式　16:55～17:00　（10 号館 3 階 1033 講義室）
閉会の辞　日本英文学会中部支部 副支部長　中　郷　　慶

研究発表一覧

第１室（イギリス文学）10 号館 4 階 104B ゼミ室

司　会　　石　川　隆　士（甲南大学教授）

1. Britomart and the Rewriting of the Hero's Journey in Book III of *The Faerie Queene*

CHEN Lu（富山高等専門学校講師）

司　会　　小　西　章　典（大同大学教授）

2. 終戦の年に開幕を迎えた A.A.ミルン三戯曲—4 月、9 月、12 月を中心として—

石　塚　杏　樹（金城学院大学非常勤講師）

司　会　　鈴　木　実　佳（静岡大学教授）

3. トマス・ブラウン著『壺葬論』と『キュロスの庭園』の予型論的読解の試み
A Typological Reading of Thomas Browne's *Hydriotaphia and The Garden of Cyrus*

宮　本　正　秀（大東文化大学教授）

第２室（アメリカ文学・イギリス文学）10 号館 4 階 104C ゼミ室

司　会　　柳　沢　秀　郎（名城大学教授）

1. *For Whom the Bell Tolls* における Maria の尊厳

沖　崎　あいみ（金城学院大学大学院）

司　会　　本　田　安都子（福井大学准教授）

2. Matt Taibbi の *Hate Inc.*（2019）に見られるポスト・コメディー時代のジャーナリズムと文芸的戦略

千　葉　洋　平（中京大学准教授）

司　会　　石　川　隆　士（甲南大学教授）

3. D. C. Muecke の Irony と Edward Seidensticker（1921-2007）
翻訳版『蜻蛉日記』（1955, 1964）短歌の間接的な暗喩

西　川　明　美（愛知学院大学大学院）

第３室（英語学）10 号館 4 階 104D ゼミ室

司　会　　内　田　脩　平（愛知淑徳大学講師）

1. 否定呼応文脈における否定前置の統語的分析

古　澤　壮太郎（名古屋大学大学院）

司　会　　北　尾　泰　幸（愛知大学教授）

2. CLMET コーパスを用いた状態変化動詞に後続する前置詞句に関する一考察

藤　原　隆　史（松本大学准教授）

シンポジウム要旨

第 1 室（イギリス文学）　10 号館 4 階　104B ゼミ室

身体、感覚とイギリス・モダニズム

司会・講師	中部大学教授	伊藤裕子
講師	甲南大学教授	石川隆士
講師	名古屋外国語大学講師	中土井智
講師	岐阜聖徳学園大学講師	四戸慶介

身体、感覚、感情といった分野は理性的思考と二項対立的に、時に劣ったものとして捉えられる傾向にあるが、こうした恣意的な領域のテーマが文学批評においても近年着目されている。本シンポジウムでは、20 世紀初頭の作家、特にヴァージニア・ウルフと W. B. イェイツの作品に焦点を当て、身体および感覚の表象を考察する。モダニズムとその周辺の作家が、19 世紀までの思潮を転覆すべく、身体や感覚の表象に新しい地平を切り拓いたのか否かを探る。ここで取り扱われる作家は、テーマとしたい身体の表象、感覚の表象を「刷新して」あらわしているのだろうか。当時の社会的規範を覆したといえるのか、また作家はそれを意図したかはともかく、そのような転覆を結果としてもたらした点はあるのか。それとも、彼らの五感や身体にまつわる表現は逆に伝統的価値観を増幅するものであるのか。モダニズムの時代を生きた彼らは当時の社会や制度に対して批判的姿勢をとっていたり、詩的革新性を表明していたといえるが、彼らの身体や感覚にまつわる表現は、それぞれの場でどのような影響力を持ち得たのか検討する。登壇者は、神秘と身体、痛みの政治性、視覚と身体感覚、嗅覚と無感覚といったそれぞれの論点から議論を展開し、情動理論やアフター・セオリーの批評的枠組みによりつつ、二度の大戦の政治的および社会的文脈、および大戦の記憶にも照準を絞り、モダニズムの術策としての身体と感覚の可能性を探る。

生成における統合と分裂：W.B. Yeats の神秘主義的シンボリズム

石川隆士

モダニズムと身体論という意欲的なテーマ設定において、身体あるいは身体的感覚といったものの「表象」にある種の革新めいたものがもたらされたことが焦点となると考えられる。もちろんその場合、その前の時代のもの、いわゆる伝統的なものとの非連続性が問

題化される。一方で身体的なものに限らず、伝統性と革新性が混在しているところに Yeats の魅力があり、その意味で彼をモダニストと安易に位置づければ論争という寝た子を起こすことになろう。今回の発表では、おそらく多くの Yeats 研究者が直視することを避け、通り一遍の言及に終始してきた彼自身の神秘的シンボリズムが、身体、感覚、意識への根本的理解に対して革新的な考え方を「意図せず」もたらすことになったことについて考察したい。それは「生成と流動性」という概念であり、「表象」にたいしても、恣意性、暫定性等の点において有効な議論を提示するが、身体を構成する物質的側面にも作用する概念であることにも目くばせしながら論じたい。

ウルフ『灯台へ』の視覚とその社会的な意味について

中土井　　智

本シンポジウムのテーマである感覚のうち、本発表では視覚をとりあげる。イギリスのハイ・モダニズム期の作品であるヴァージニア・ウルフの『灯台へ』（1927）は、視覚芸術に携わる画家のリリー・ブリスコウが中産階級のラムゼイ夫人（の像）を描く試みを、第一次世界大戦の前後およそ 10 年にわたり描く。

『灯台へ』の視覚に関しては、形而上の形式を問題とする後期印象派美術の美学との共通点が指摘されてきた。しかし、本作品の色の表現に作者のフェミニズム思想を解釈した Jane Goldman は、本作品の美学は、形而下にある社会現実の反映でもあると主張した（Goldman 1998）。また『灯台へ』の草稿を調べた Amber Jenkins が指摘するように、本作品の当初の主題は、イギリス社会において女性芸術家が周縁化される状況であった（Jenkins 2021）。実際、第三部でリリーが見つめるモノは生々しい身体的な現実である（“It was body feeling, not one’s mind”）。

本発表は、90 年代以降のアフター・セオリーの批評動向に沿いながらも、リリーの視覚を通じた身体感覚の表現を、作品中の言葉、とくに身体にかかわる比喩に焦点を絞って考察し、その意味を第一次世界大戦前後の社会的文脈において考えたい。

ヴァージニア・ウルフの『歳月』と悪臭

伊　藤　裕　子

五感の中でもヴァージニア・ウルフは嗅覚をどのように描き出したのか。ウルフの小説の中でも特に『歳月』（1937）は、様々なシーンに悪臭が立ち込めている。本小説を際立たせている感覚の表現の一つとして、汚れた衣服、病人、死にかけた動物、洗面台、堆肥、家のにおい、また生焼け、生煮えの食材による食事や空襲のシーンと立ち込めるにおいの表現といった、嗅覚の表象が挙げられる。本発表では、悪臭、感覚麻痺の表現を、社交界の煌びやかな香の空間に対するウルフ自身の記述、またその他の作品中の表現と対比させつつ、

嗅覚の表現によって読者にいかなる共感を巻き起こそうとしているのかを探る。この小説はパージター家の家族の生き様を 1880 年から小説中の「現在」まで約 50 年間の年月の流れを追って描いたものであるが、登場人物の感覚という観点から小説中の時代の変化を読み解き、無感覚か、ほとんど麻痺してしまったかに等しい感覚が、大戦の記憶といかに結び付けられているのかについて、解釈の可能性を探りたい。

ヴァージニア・ウルフの『幕間』における痛みの表現

四　戸　慶　介

本発表では、ヴァージニア・ウルフの小説『幕間』（1941）で描かれる女性登場人物の歯痛の感覚を第二次世界大戦前夜の政治的状況との関連から考察する。『幕間』はあるイギリスの田舎の共同体に暮らす人々を描いた物語である。この作品は主にオリバー家の人々に焦点を当てながら、特にアイザ・オリバーとその夫ジャイルズの夫婦生活に垣間見る不和を描き出す。同時にこの作品では、彼らが暮らす共同体で村人によって演じられるパジェント劇を通してイギリスの歴史にも焦点を当て、結果として一家庭の私的問題と人々に共有されるイギリスの歴史、といった公私のトピックの対比が強調される。

身体や感覚といったキーワードからモダニズムを考える本発表では、作中で描かれるアイザの歯痛の表象に注目する。日常的な歯の治療や歯痛にかかわる経験のモチーフが、作品内で圧倒的な父権的暴力に直面するある女性の経験と共鳴しながら政治的色彩を帯びていく。さらにそうした痛みの経験がパジェント劇に降る雨を通して「人類が痛みに流す涙」として複数の経験として作品内で反響しているのでは、という読みの可能性を提案することで、ウルフ作品で刷新されているかもしれない身体感覚の表象について考えてみたい。

アメリカ現代文学とディストピア

司会・講師　中部大学助教　安保夏絵
講　師　関西学院大学教授　髙村峰生
講　師　岐阜大学准教授　林　日佳理

本シンポジウムでは、21 世紀以降のアメリカ現代文学におけるディストピアについて、メディア・身体・ジェンダー・消費・権力等の現代のアメリカの社会的要素と関連づけながら議論し、作品におけるディストピア的な要素を多角的な視座で読解することを目的とする。近年、ディストピア文学は新たな社会的・文化的文脈を背景に再び注目を集めている。とりわけトランプ政権期以降に顕在化した民主主義の揺らぎ、さらにはパンデミックや気候変動といったグローバルな危機を反映しつつ、このジャンルはその枠組みを越えて多様化している。本シンポジウムでは、そうした変化を踏まえ、近年のアメリカにおけるディストピア文学の特徴について、支配と被支配、物語構造の変容、ジェンダーといった観点から検討する。ディストピア文学は、単に未来予想図を描いた空想的な物語ではなく、われわれの現実社会に潜む制度的な不安、異常性、物語の構造的矛盾を浮かびあがらせる「装置」として機能していることを明らかにする。

『ハンガー・ゲーム』シリーズにおける「感情」の編集

髙村峰生

近未来の北アメリカに位置する独裁国家パネムを舞台とするディストピア作品『ハンガー・ゲーム』シリーズは、21 世紀最大のベストセラーの一つであるだけでなく、現在進行しつつある世界各国の中央集権化に強い関連性を示す政治的フィクションである。このシリーズは、12 の地区から選ばれた男女 1 人ずつの少年少女、合計 24 人のトリビュートと呼ばれる競技者が閉鎖された競技場で互いに殺しあう「ハンガー・ゲーム」を中心に描いているが、特徴的なのはこのゲームがテレビ中継されるだけでなく、観客も好きなトリビュートに差し入れをすることができる参加型イベントであることである。このルールのために、トリビュートは互いに殺しあうだけでなく、視聴者の「共感」を引き出す行動をとる必要がある。本発表では、メディア的に構築された「自己」のイメージがもたらすディストピア性について、本シリーズ第一作『ハンガー・ゲーム』（2008）における主人公カットニスとピータの虚実入り混じる恋愛、ならびに最近作である第五作 *Sunrise to the Reaping*（2025）における国家権力に都合よく編集される動画制作のプロセスを中心に検討する。

ディストピアはどのような「顔」をしているか

——David Foster Wallace のエブリディ・ディストピア

林　　日佳理

David Foster Wallace は、George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* や Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* のような、特徴的な支配体制や政変からなるディストピアではなく、日常と地続きの、うんざりするような、緩慢に進行するディストピアを描く。たとえば、スーパーマーケットのレジ前の長蛇の列を資本主義的な地獄と見る Wallace は、みずからの小説世界を、一度見たら死ぬ映画や救いようのない薬物中毒者などで埋めていくが、そのディストピア的世界観の表象にはつねに「顔」の問題が潜んでいる。本発表では、Wallace の描くディストピアの「顔」について、キャラクターの表情だけでなく街全体の視点——鳥瞰図で見ると女性の横顔になっている街や、いたるところに掲げられる鎮痛剤の広告イメージ、ビデオ通話の普及と衰退のエピソードなど——から、支配者の顔ではなくそこに暮らす一人一人の（広義の）「顔」の異常・機能不全としてのディストピアを考えていく。

ヒューマノイドの生殖可能性の不在

——マッドアダム三部作における身体の奪取

安　保　夏　絵

Margaret Atwood の小説では、たとえば *The Handmaid's Tale* に見られるように、妊娠可能な女性が国家によって管理されることで、女性の身体が再生産の手段として道具化されるディストピア世界が描かれている。こうしたテーマは、Atwood の後期作品であるマッドアダム三部作（MaddAddam Trilogy）にも引き継がれ、変容を遂げている。この三部作では、人類がウイルスの蔓延により壊滅的な危機に瀕するなか、人間の女性たちがヒューマノイドである「クレイカー」と半ば強制的な性行為を経て妊娠し、「フランケンベビー」を出産する。その一方で、ヒューマノイドの「女性」たちが出産する場面に焦点があてられず、物語から排除されているという印象を残している。このような描写の不在は、Atwood による重要な問いかけを含んでいると考える。本発表では、特に不妊症を患ったトビーや高齢のピラーといった女性キャラクターの「死」の描写に注目しつつ、人間の女性の身体がいかにして再び搾取されるのか、またヒューマノイドの妊娠の描写が物語の「外」に置かれていることにどのような意味があるのかという問いについて検討する。

理論言語学、対照言語学的視点から見た主語と目的語の非対称性に対する統語的アプローチ

司会・講師	南山大学講師	勝　慎　将
講　師	福井大学講師	廣　川　貴　朗
講　師	東京農工大学講師	野　口　雄　矢
講　師	中部大学講師	田　中　祐　太

主語と目的語の非対称性は生成文法における重要な研究課題の一つであり、これまで様々な観点から研究されてきた。Chomsky（1973, 2008）は、主語の島の制約により、主語からの要素の抜き出しが制限される一方で、目的語からの要素の移動は自由であることを指摘している。こうした古典的な観察も、新たな理論的枠組みから再検討することで人間言語の構造に対する新たな洞察をもたらす。例えば、Chomsky（2015）は、EPP 特性や that 痕跡効果における主語と目的語の非対称性に着目し、従来の投射概念に対する新たな視座を提示した。また、Chomsky（2021, 2024）や Bošković（2024）等の近年の研究でも、主語と目的語は再び注目を集めている。更に、英語とは異なる文法的特徴を持つ日本語の分析は、英語の現象のみに基づく理論では捉えきれない側面を明らかにする手掛かりとなる。本シンポジウムでは、英語や日本語を中心とした主語と目的の、i）解釈における差異、ii）統語的位置の差異、iii）適用可能な統語操作の差異に焦点を当て、主語と目的語の統語的特性を多角的に探究する。

主語と目的語の非対称性：叙述と解釈について

廣　川　貴　朗

Chomsky（2021、2024）において、英語の INFL 指定部に生起した主語は Argument of Predication の意味役割が付与され、これに伴って存在前提をもつと主張されている。加えて、不定詞節の主語が目的語繰り上げ構文において主節に上昇した際にも同様の存在前提をもつと指摘されている。その一方で、目的語や基底位置の主語は存在前提解釈が強いられない。本発表は英語の主語と目的語の解釈に見られる非対称性に焦点を当て、Chomsky（2024）の枠組みにおいて叙述構造とアクセスの観点から分析する。具体的には、INFL 指定部の主語と目的語の存在前提の有無の差異のほかに、通常の目的語は特定的（specific）解釈が強いられないのに対して、目的語が叙述の主語として振る舞う場合には特定的解釈

が強いられる事実や、これに反して叙述関係にあるとされる INFL 指定部の主語は特定的解釈が強いられない事実に対して説明を与える。

日本語における主語と目的語の主題化に見られる非対称性について

野　口　雄　矢

日本語では、文中の要素が助詞「は」を伴い、特別な特立を伴わず、文頭で発音された場合、（純粋）主題（(thematic）topic）として解釈される。本発表では、日本語における主題化された主語（主語主題）と目的語（目的語主題）の間に見られる非対称的な統語的特性をもとに、日本語の主題の統語論について議論する。まず、日本語では、主語主題と目的語主題が共起できることを観察し、さらに、共起した場合、目的語主題が主語主題に先行しなければならないことを観察する。この非対称性をもとに、日本語の統語構造における CP 領域には、主題が位置する投射が 2 つ存在し、上位の投射には目的語主題が、下位の投射には主語主題が位置すると主張する。さらに、これらの 2 つの投射について議論し、まず上位の投射については、目的語主題に加え、無空所主題（gapless topic）も生起し得ると主張する。一方、下位の投射は、Bošković（2024a,b）により提唱された、A 位置と A'位置の両方の特性を備えた A/A'P であると主張する。この主張により、主語主題と目的語主題の間の語順の制約が説明されることを示す。

フェイズレベルにおける経済性条件と抜出しの可否

田　中　祐　太

現行の極小主義の枠組み（Chomsky 2015, 2021）では、構造構築操作は併合のみであり、構築された構造に対してはフェイズレベルで、素性の値付け、コピー形成、ラベル付け等の操作が適用されると仮定されている。本発表では、フェイズレベルで適用されるこれらの操作に対し、経済性に基づく条件が課されると提案し、Chomsky（2008）などで議論されている主語と目的語からの抜出しに見られる対比に統一的な説明を与える。具体的には、フェイズレベルにおいてあるタイプの操作を受けた統語対象は、経済性の観点から当該フェイズレベルで同じタイプの操作を再度受けることができないと提案する。 この提案に基づき、外項（主語）からの抜出しは、その構造上の特性のため経済性条件に違反し、適切なラベル付けができないと主張する。一方で、内項（目的語）からの抜出しはこの条件に違反せず、適切なラベル付けが可能であると主張する。さらに、Chomsky（2008）などの先行研究の分析では予測が困難とされてきた事例についても、本分析によって正しく予測できることを示す。

主語と目的語からの抜き出しの非対称性について

勝　　愼　将

本発表では、主に主語と目的語からの抜き出しの差異を論じる。Chomsky (2008) 等で、主語要素からの wh 要素等の抜き出しは非文法的になる一方で、目的語位置からの抜き出しは可能になることが指摘されている。ただし、これは単純に主語と目的語の問題ではなく、主語が移動していない場合、そこからの抜き出しは可能となる（Gallego and Uriagereka 2007)。本研究では、この事実に対して Chomsky（2024）の枠組みを用いた検討を試みる。Chomsky（2024）では、θ 役割が構造構築操作に深くかかわっている仮定を元にした枠組みが進められており、具体的には、1. 移動操作は統語要素を命題領域（θ 領域）から談話領域へと移し替える操作であり、2. 一度移動を受け、談話領域に位置する要素は、それ以降の統語操作の適用対象外になるとされている。この見方に基づき、主語と目的語の違いは、両者はともに移動を受けるが（Chomsky 2015)、目的語と異なり、主語は移動後の位置が θ 領域である *v**P の外であることが、主語と目的語からの抜き出しの可否の違いを生じさせると分析する。

研究発表要旨

第１室（イギリス文学）10 号館 4 階 104B ゼミ室

司　会　　甲南大学教授　　石　川　隆　士

第 1 発表

Britomart and the Rewriting of the Hero's Journey in Book III of *The Faerie Queene*

富山高等専門学校講師　CHEN Lu

This presentation examines how Book III of Edmund Spenser's *The Faerie Queene* reimagines the traditional hero's journey through the figure of Britomart, a female knight embodying chastity. Drawing on Joseph Campbell's monomythic structure, I argue that Britomart's quest parallels key stages of the hero's journey—such as the call to adventure, trials, transformation, and return—while simultaneously disrupting its masculine norms. Unlike traditional male heroes, Britomart is driven by love, not conquest; she enters the quest through a prophetic vision and journeys across gendered and narrative boundaries. Her chaste pursuit functions not as renunciation, but as a vehicle of agency, prophecy, and future governance. By situating Britomart within and against the hero's journey model, this reading reveals how Spenser crafts a complex allegorical heroine who challenges patriarchal epic conventions. The analysis highlights the potential of the female hero not only to fulfill but also to revise mythic narrative structures, making Britomart's story a compelling example of poetic innovation within the Elizabethan allegorical tradition.

司　会　　大同大学教授　　小　西　章　典

第 2 発表

終戦の年に開幕を迎えた A.A.ミルン三戯曲—4 月、9 月、12 月を中心として—

金城学院大学非常勤講師　石　塚　杏　樹

A.A.ミルン（1882-1956）が、J.M.バリー（1860-1937）の誘いにより、編集者から戯曲家として成功が始まるのは、戦時中の 1917 年からである。バリーの作品にオムニバスの形で一幕劇を追加させてもらったことがきっかけである。本発表では、首相から戦争協力を依頼されてバリーが書いた『決行の日、またの名、悲劇の人』（*Der Tag: or the Tragic Man*, 1914）という一幕劇も参考にしながら、終戦の年に、季節の移ろいのように変わる、戦争の情勢と、次々と初演されるミルン戯曲について、テーマ、プロット、台詞を比較しながら、その変遷理由を考察する。扱う作品は次の三作品である。18 年間失踪している夫を待つ主人公の心理描写を中心とした『ベリンダ』（*Belinda*, 4 月 8 日初演）、戦後の兵士の社

会復帰をテーマとした『少年の帰還』（*The Boy Comes Home*, 9 月 9 日初演）、そして、オムニバス形式の三幕の児童劇『見せかけ』（*Make-Believe*, 12 月 24 日初演）である。全て喜劇でできており、共通点は、ミルンの視座にバリーへの敬意が消えないことである。

司　会　　静岡大学教授　　鈴　木　実　佳

第 3 発表

トマス・ブラウン著『壺葬論』と『キュロスの庭園』の予型論的読解の試み

A Typological Reading of Thomas Browne's *Hydriotaphia* and *The Garden of Cyrus*

大東文化大学教授　宮　本　正　秀

新約聖書の人物や出来事が、旧約聖書においてすでに語られているとする聖書解釈の方法を予型論的（typological）解釈という。本発表は、この方法をトマス・ブラウン（Thomas Browne）の 2 編の散文作品、『壺葬論』（*Hydriotaphia*）と『キュロスの庭園』（*The Garden of Cyrus*）の読解に応用するという試みである。これらの 2 作品は 1658 年に合本形式で刊行されているが、今では独立した 2 作品として別々に論じられることがほとんどである。本発表ではこれらを、一対をなすものとして捉えなおし、さらに予型論的な視点を応用し、従来とは異なる視座からの解釈を試みる。

本発表では、著者ブラウンが王党派の医師であり、自然科学に強い関心を寄せる人物であったことにも注目し、当時の社会情勢や知的動向なども視野に入れながら議論を進めることになる。

第 2 室（アメリカ文学・イギリス文学）10 号館 4 階 104C ゼミ室

司　会　　名城大学教授　　柳　沢　秀　郎

第 1 発表

For Whom the Bell Tolls における Maria の尊厳

金城学院大学大学院　沖　崎　あいみ

Ernest Hemingway の長編小説、*For Whom the Bell Tolls*（1940）は、共和派の義勇兵であるアメリカ人 Robert Jordan が、スペインの山中にある鉄橋爆破の任務に挑む姿を描いた物語である。従来の批評では、Hemingway hero の code に基づいて、主人公の自己犠牲的な死における尊厳が注目されてきた。しかし、Hemingway hero の code という枠組みに依拠して尊厳が探求される時、その視点は英雄的主体に特権的に集中し、それ以外の人物の尊厳はしばしば不可視化される。特に、ヒロインである Maria は全く意志や主体性を欠いた人物として解釈される傾向があった。本研究では、彼女が独自の尊厳を有する人物であると捉え、その役割と意義について再評価を試みる。これまで認識されなかった Maria の尊厳を再評価することで、戦争や恋愛など異なる領域の問題を結びつけ、これま

で批判されてきた *For Whom the Bell Tolls* における主題の多様性が、新たな解釈のもとで統合される可能性を探りたい。

司　会　　福井大学准教授　　本　田　安都子

第 2 発表

Matt Taibbi の *Hate Inc.*（2019）に見られるポスト・コメディー時代のジャーナリズムと文芸的戦略

中京大学准教授　千　葉　洋　平

インターネット空間において議論で相手を打ち負かすことが至上命令となる中で、人々の行動パターンを笑いとして扱うことは差別的であるとされている。これにより文学だけでなくジャーナリズムにおいてもどのように表象し、それをどう読み解くかが重要な課題となっている。ジャーナリスト Matt Taibbi は、インターネットを利用したジャーナリズムの代表的存在でありつつ、主流メディアに対する批判とともに客観性を前提とした語り方とは別の方法で合衆国の政治を報道している。彼の語りは、1960 年代のニュー・ジャーナリズムの影響を受けており、読解に対する笑いの強度への配慮がある点で、文学読解の政治性を想起させるものである。本発表は、文芸的な表現とされてきた隠喩や誇張や視点が現代のジャーナリズムにおいて応用されるようになった歴史的状況を明らかにしつつ、分断を生み出す現代のメディア環境において、コメディーの有用性を指摘する。

司　会　　甲南大学教授　　石　川　隆　士

第 3 発表

D. C. Muecke の Irony と Edward Seidensticker（1921-2007）
翻訳版『蜻蛉日記』（1955, 1964）短歌の間接的な暗喩

愛知学院大学大学院　西　川　明　美

D. C. Muecke（1919～2015）は、前作 *Irony (*1976）を手直しして、*Irony and the Ironic* を 1982 年に出版した。彼はこの改訂版では、前作にはなかった The ironical and the non-ironical の関係を確立させるべく、Plato（B.C. 427 ～347）から今日に至る迄の Irony の要約を行い colloquial irony の地理的・社会的・宗教的・教育的・職業背景の重要さを説いた。改訂版の Orientation で、「日本の『蜻蛉日記』の短歌が、間接的な暗喩を通して Irony に近い」と述べている。本発表では、Muecke による両著書の Irony の比較を行い、Edward Seidensticker（1921-2007）の『蜻蛉日記』英語翻訳版（1955 年、1964 年）から間接的な暗喩がアイロニーに近いことを考察する。

第３室（英語学）10 号館 4 階 104D ゼミ室

司　会　　愛知淑徳大学講師　　内　田　脩　平

第 1 発表

否定呼応文脈における否定前置の統語的分析

名古屋大学大学院　古　澤　壮太郎

否定呼応とは、複数の否定要素が単一の否定を表す現象のことである。本発表では、否定呼応の文脈における否定要素の前置の歴史的変化に関して統語的説明を与えることを試みる。先行研究である Koike（2016, 2017）は、否定倒置が駆動されるのは、文否定要素と T 主要部が同じ転送領域内にあることが求められるからであると提案している。本発表では、歴史コーパスを用いて、not と T が同じ転送領域内にない例や、文否定標識でない否定要素が前置された時にも倒置が発生する例を上記の条件に対する反例として提示する。また、否定要素の前置による倒置の有無の通時的変化について調査を行い、後期古英語期の初めから否定要素の前置が倒置を駆動するようになったと主張する。これらの調査を踏まえ、Wallage（2012）や Ingham and Tubau（2020）などに代表される一致操作を用いた分析を一部採用し、解釈可能な否定素性を含む NegP が前置された時に倒置が駆動され、さらに、素性は双方向的に変化すると提案する。

司　会　　愛知大学教授　　北　尾　泰　幸

第 2 発表

CLMET コーパスを用いた状態変化動詞に後続する前置詞句に関する一考察

松本大学准教授　藤　原　隆　史

状態変化動詞には前置詞 in と into の両方が後続することが知られているが、現代英語においては in 結果句の頻度は極めて低い。本発表は、状態変化動詞（break, cut, tear）に後続する in と into 結果句の出現頻度に関して、CLMET コーパスを用いて、1710 年から 1920 年にかけて通時的に分析したものである。分析にはカイ二乗検定を用いて、40 年毎の各結果句の出現頻度を統計的に調べた。その結果、カイ二乗値は χ^2（5, N= 219）= 39.9, p < .001, Cramér's V= 0.427 で有意であり、in と into の使用は年代と有意に関連していることが示された。さらに残差分析では、1740 年と 1820 年には in の頻度が期待より高く、into は逆に低い一方、1900 年には into の頻度が有意に高く、in は顕著に低下していた。これらの結果は、英語史における格消失や語用論的・統語的補償現象による in から into への機能交替の過程を示唆するものである。

大会関係役員一覧

支部長	太　田　直　子	(愛知淑徳大学)
副支部長	中　郷　　慶	(愛知淑徳大学)
支部選出評議員	田　中　智　之	(名古屋大学)
支部代表理事	内　田　　勝	(岐阜大学)
事務局長	二　村　慎　一	(愛知淑徳大学)
事務局長補佐	樗　木　勇　作	(愛知淑徳大学)
事務局長補佐	若　山　真　幸	(愛知淑徳大学)
書　記	小　沢　　茂	(愛知淑徳大学)
監　事	小　池　晃　次	(富山大学)

大会準備委員（◎委員長　○副委員長）

英文学	小　西　章　典	(大同大学)
	石　川　隆　士	(甲南大学)
	○鈴　木　実　佳	(静岡大学)
米文学	柳　沢　秀　郎	(名城大学)
	本　田　安都子	(福井大学)
英語学	玉　田　貴　裕	(皇學館大学)
	内　田　脩　平	(愛知淑徳大学)
	北　尾　泰　幸	(愛知大学)
	◎大　澤　聡　子	(岐阜市立女子短期大学)

開催校大会準備委員

安　保　夏　絵
伊　藤　裕　子
田　中　祐　太
平　田　拓　也
柳　　朋　宏

日本英文学会中部支部事務局

〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目 9
愛知淑徳大学 長久手キャンパス 二村慎一研究室内
E-mail: chubu@elsj.org
HP: http://www.elsj.org/chubu/